菩提心について
――法然を中心として――

小池秀章

序

菩提心とは、悟りを求める心である。又、特に、大乗仏教においては、自分一人が悟りを成就しても本当の悟りとは言わない。菩提心とは、自らが悟りを求める心（上求菩提）であると同時に、それは衆生を救済しようとする心（下化衆生）でなければならない。一般的に考えれば、仏道を歩む人が、菩提心を起こさねばならないことは、当然のことである。しかるに、法然は念仏一行を選取し、菩提心を廃捨した。それは、いかなる理由からであろうか。又、本当に全ての菩提心を否定したのであろうか。

一　『選択集』における菩提心

『選択集』では、随所において、菩提心廃捨の姿勢が見られる。

第一に、「本願章」では、選択の意味を述べる中で、「諸仏の土のなかにおいて、布施・持戒などの行を往生の行とする土があり、或いは菩提心を往生の行とする土があり、往生の行はさまざまであり細かくは述べないが、今は先に挙げた、布施・持戒、乃至孝養父母等の諸行を選び捨て、称名念仏を選び取る。」と、菩提心を含む諸行は、往生の行とせず選び捨て、念仏のみ往生の行として選び取っているのである。

第二に、「三輩章」では、『観経疏』の文を根拠に、「上輩の中に菩提心等の余行が説かれてはいるが、上に説かれた本願を窺ってみると、その意はただ衆生に称名念仏させることにある。そういうわけで本願の中に余行が説かれていないのである。」と、善導の意に従いつつ、菩提心等の余行を廃し、念仏のみを選び取ることを明らかにしているのである。そして、「三輩ともに上の本願によるがゆえに、「一向専念無量寿仏」（大経・下）といふ」と、その根拠は常に、本願の中に念仏のみ説かれ、菩提心は説かれていないというところにおいているのである。

第三に、「利益章」では、「三輩の文に念仏の他に菩提心等の功徳を挙げているのに、なぜ念仏の功徳のみを讃めるのかという問いを起こし、それに答え、釈尊の意は測り難いが、善導の意に従って言えば、釈尊は、本当はすぐに念仏を説きたかったけれど、機に従って一応菩提心等の諸行を説いて、三輩の浅深を分別しただけなので、念仏のみについて讃嘆しているのである。」と言い、結論的には、「菩提心等の諸行を小利となし、念仏を大利となす。往生を願う人、どうして無上大利の念仏を廃して、菩提心等の有上小利の余行を修することがあろうか。」と菩提心等の有上小利の余行を廃し、無上大利の念仏を取ることを勧めるのである

第四に、「特留章」では、「経道滅尽しても、この経を止め置くということは、すなわち、念仏を止め置くということである。その理由は、この経に菩提心の言葉はあるけれど、行相が説かれていないからである」と言っている。つまり、念仏は、三宝滅尽の時も滅しないが、菩提心は、その行相が説かれる『菩提心経』等が先ず滅してしまうので、その拠り所を失ってしまうというのである。

第五に、「念仏付属章」では、善導の『観経疏』の文を受けて、定散と念仏の二行をあげ、散善について詳説している。散善について三福をあげ、その三番目に「発菩提心」について、諸師の説は不同であるといい、天台の四教の菩提心、真言の三種の菩提心をあげ、更に、華厳、三輪、法相、それぞれに菩提心があると指摘している。また、善導の菩提心もあるという。そして、「菩提心は広く諸経に説かれ、顕密の深義がおさめられているので、浅薄な考えでその一端をとらえて批判すべきではない。もろもろの往生を求める人は、自宗の菩提心を発すべし。余行がなくとも、菩提心を往生の業となす。」と各宗にそれぞれの菩提心があることを認め、往生を求める人は、自宗の菩提心によることを説くのである。

しかし、この章の終わりの部分では、散善の行について述べた後、「その中でも、持戒・発菩提心・解第一義・読誦大乗の四種の行は、現代の人が特に好んでいる行である。その為、これらの行が念仏を抑えてしまっているのである。」と菩提心が念仏を抑えてしまっていると主張している。

そして、更に、経の意は、諸行を付属流通するのではなく、ただ念仏の一行を後世に付属流通しているといい、その理由として、弥陀の本願によると結論づけているのである。

以上、『選択集』における菩提心について見てきたわけであるが、結論的に言えば、「浄土往生の行として、菩提心等の諸行を廃捨し、念仏一行を選取する」ということに尽きる。そして、その根拠はどこにあるかと言えば、弥陀の本願にある（念仏こそ本願に誓われた行である）とするのである。

二　『摧邪輪』における批判

『摧邪輪』における高弁の批判の要点は、次の三つにまとめられる。

①菩提心の体性は、空性無我であり、これを廃捨するということは、仏教の原理を否定することになる。

②法然は、菩提心を諸行の中の一行として廃捨するが、高弁は、諸行の根本に菩提心があるとする。よって念仏の根本にも菩提心があると見る。

③法然は、弥陀の本願には念仏一行が説かれ、菩提心は説かれていないと見るが、高弁は、弥陀の本願に菩提心ありと見る。

このような批判がでるのは、法然と高弁の仏教理解の枠組みの相違によるものである。

高弁は、「称名一行は、劣根一類の為に授くる所なり。汝、何ぞ天下の諸人を以て皆下根劣機と為すや、無礼の至称計すべからず。」と、称名は、劣機の為の行であるが、すべての人を劣機とするのは無礼であると言う。つまり、自らが劣機であるという自覚はなく、機類に応じた諸行往生を主張していると言える。又、称名も縁発心の菩提心を根本とするのは当然であり、最終的には、念仏三昧（定善）の成就による成仏を主張している。よって、本願には、菩提心なき念仏（称名）一行が誓われているのではなく、当然、その根底には、菩提心ありとするのである。

それに対して法然は、「まことにこの身には、道心のなき事と云々」（『西方指南抄』）と自らのことを無道心の者、つまり、菩提心など到底起こしえない劣機であるとしている。又、「わがごときは、すでに戒・定・慧の三学のうつは物にあらず云々」（『和語灯録』）と、自らを三学の修行に耐えられない存在であり、私たちのような無智の者は、称名念仏して浄土往生の業因とするべきであると言う。そして、その根拠として、善導の遺教を信じるからということだけでなく、弥陀の本願にかなっているから（「順彼仏願故」）ということを挙げている。つまり、菩提心について、高弁は、従来の通仏教の枠組みで理解しているのに対し、法然は、「無道心の身」という自覚（人間観）の上に成立する、本願を根底とした新しい仏教の枠組みで理解しているのである。

三　浄土宗の菩提心

『選択集』以外の法然の著作では、『選択集』にない菩提心の解釈も見られる。『和語燈録』「三経釈」では、『観経』を解釈する中、「浄土宗の心は、浄土にむまれんとねがふを菩提心といふ。」と言い、『三部経大意』の回向発願心の解釈では、『観経』の九品の業を述べる中、「浄土宗のこころは、浄土にむまれむと願ずるを菩提心といへり。」と言う。これらの文によると、浄土宗の菩提心は、浄土に生まれようと願う

心（願生心）であると言える。

又、『漢語燈録』「逆修説法」において、散善（三福九品）の三福を解釈する中、「いま浄土宗の菩提心は、先ず浄土に往生して一切の衆生を度し、一切の煩悩を断じ、一切の法門を悟り無上菩提を証せんと欲する心なり。」と言う。そして、上品下生の所で、経に「但発無上道心」と説かれるのは、菩提心の往生であると言い、菩提心について、各宗の不同なることを示し、「善導の意は、自ら先ず浄土に生じて菩薩の大悲願行を満足して後、還りて生死に入りて、遍く衆生を度せんと欲す。即ち此の心を以て菩提心と名づくなり。」と言う。

これらの文によると、諸宗の菩提心は、それぞれ相違があるが、皆此土でのことである。しかし、浄土宗の菩提心は、浄土往生後、悟りを開き（上求菩提）、衆生を救済（下化衆生）するのである。これにより、浄土宗の菩提心は、願生心であるが、それは為楽願生ではなく、浄土往生後、上求菩提・下化衆生に尽くす心であることが明らかである。

つまり、法然は、『選択集』で廃捨された菩提心の他に、浄土宗の菩薩心を説いていると言えよう。浄土宗の菩提心とは、浄土に生まれようと願う心（願生心）である。しかし、それは、為楽願生の心ではなく、浄土往生後、上求菩提・下化衆生に尽くす心である。

結論

法然は、真剣な求道の中、「菩提心など起こせない私」という現実にぶちあたり、この私が救われる道は、「ただ念仏」以外にない。何故なら、それこそ本願にかなった道であるからである。ということを善導の文との出遇いにより見極めた。そのことを『選択集』に表したのである。法然は、そういう立場に立っているので、当然、往生の行として、菩提心等の諸行を廃捨し、念仏一行を摂取したのである。つまり、菩提心について、法然は、「無道心の身」という自覚（人間観）の上に成立する、本願を根底とした新しい仏教の枠組みで理解したのである。

しかし、菩提心を全面的に否定したのではない。往生の行としてではなく、浄土に生まれようと願う心（願生心）こそ浄土宗の菩提心であるとするのである。当然、それは、為楽願生の心ではなく、浄土往生後、上求菩提・下化衆生に尽くす心につながるものである。但し、法然は、浄土宗の菩提心についての詳説はされていない。故に、法然滅後、『摧邪輪』で指摘されたこともあって、菩提心をどう領解するかが、法然門下にとって、重要課題となったのである。（註省略）

〈キーワード〉　菩提心、法然、『摧邪輪』

（京都女子学園）